

表現主義の文学と行動主義

著者	松尾 早苗
雑誌名	人文論叢 : 三重大学人文学部文化学科研究紀要
巻	26
ページ	85-100
発行年	2009-03-31
その他のタイトル	Aktivismus in der expressionistischen Literatur
URL	http://hdl.handle.net/10076/10659

表現主義の文学と行動主義

松尾早苗

要旨： 行動主義はおもに第一次世界大戦勃発後からドイツ革命までの間に文学者に広まった急進的かつ組織的な精神運動として、表現主義の中・後期に理念を反映した文学作品を数多く生み出した。しかし、行動主義に関して、初期の精神的構図、運動を展開した文学者の群像、主導的理論の分析、運動をめぐる同時代の評価などを包括した考察はあまり行われていない。こうした事情から、本稿では、次のような視点に拠って行動主義の運動を捉え、行動主義と表現主義の文学的な関わり、相互間の影響を考察している。I. 行動主義の概念規定：表現主義との関連で文学史的に規定され得る概念。II. 行動主義の初期の精神的構図：ハインリヒ・マンにおける「文学と政治の統合」の要請。III. 行動主義の代表的理論：a) クルト・ヒラーの先駆的文化活動（「新クラブ」、「新パトス・キャバレー」、「カバレット・ヌー」の設立と詩集『コンドル』の編纂）および年報『目標』による行動主義の展開、b) ルートヴィヒ・ルビーナーの文学活動と行動主義、c) アルフレート・ヴォルフエンシュタインの行動主義の活動：年報『興起』の編集・発行と「新しいもの」、「人間の闘士」の提示。IV. 行動主義をめぐる同時代の評価：Th. ホイスの「文学者の政治化」、Th・マンの「美德について」、Fr・ヴェルフェルの「キリスト教者の使命」における「文学と政治の問題」、E・プロッホの「ユートピアの精神」の意義。

I. 行動主義の概念規定

表現主義の総括が活発に行われ始めた1920年、運動に深く関わったルネ・シッケレはエッセイ「表現主義はどういうものか」で、それが当初から行動主義の特徴を強く示していた状況を次のように回想した。「1910年頃、当時、主流だった自然主義と唯美主義に対する二重の反乱が生じた。それはドイツ表現主義と呼ばれた。(…)その名称で作家たちを結びつけていたもの、その名称で理解されていたものが明らかになった。(…)我々は二つの潮流のなかで不満を感じていた。我々は投機的対象に熱中する周囲の世界から抜け出たかった。軍楽隊の奏でる音楽から、情緒の温室の保存（そこには相変わらず野獣性が保持されていたが…)から抜け出たかった。我々は方策もないまま、野心に駆られ、追いつめられて第三の道へ歩み出た。当時の支配者たちと切り切って一勝負した。つまり、叫んだのだ。H・マンは「精神と行動」を発表した。ルビーナーは「詩人は政治に手を突っ込む」を書いた。ヒラーはケルが唱えた精神の政治を伝道し続けた。^{アクティヴィスム}行動主義が、つまり言葉と行動が成立した。ヘルツォークが『メルツ』誌¹⁾を引き継いでからは一段と前進した。プエムファートの『アクツィオン』誌が中心的な役割を果たした²⁾。

この翌年に発表されたイーヴァン・ゴルの表現主義回顧論でも次のように述べられていた。「表現主義は（1910年から1920年までの間）芸術形式の名称ではなく、信念（Gesinnung）の名称だった。つまり、芸術的欲求の対象よりも世界観の意味をはるかに強く持っていた。ルビーナーは「詩人は政治に手を突っ込む」を書き、あらゆる国を超えて訪れる未来のために我々が呼びかけるのは、以前の〈芸術のための芸術〉^{ラール・ソール・ラール}に代わって、〈人間のための人間〉^{ロム・アール・ロム}を求めるこ

とであると述べた。さらにカージミール・エートシュミットは「様式のプログラムではなく、魂の問題だ。人類が主題だ」と語った。(…)要請、声明、アピール、告発、願望、熱狂、闘争(…)みなそれぞれに参加していた。表現主義の作家たちは誰も保守反動ではなかった。反戦を叫ばない者はいなかった。同胞愛(Brüderschaft)と共同体(Gemeinschaft)を信じない者はいなかった」³⁾。

上記の回想とともに、現在、文学史で表現主義の部分的潮流(Teilströmung)と捉えられている行動主義が当時の作家たちに少なからぬ影響を及ぼした事実を物語っている。それゆえに、行動主義の概念規定については、それを表現主義と並行した別の一潮流と見る傾向がかつて存在した。たとえば、1934年にヴォルフガング・パウルゼンがベルン大学の学位論文として著した『表現主義と行動主義——或る類型的研究』⁴⁾では、その二つの文学潮流(=主義、-ismus)はいわゆる「表現主義の十年」に現れた対照的な基本潮流(Grundströmungen)として捉えられ、表現主義はゴシック的生活形式(現世を超越した、形而上的なものの志向)を、そして行動主義は(現世に関与した)啓蒙的傾向を表したと述べられていた。しかし、このパウルゼンの解釈は、行動主義を表現主義の一潮流と捉える、1960年以降、大勢を占めた見解⁵⁾の陰に隠れて、現在ではあまり言及されない。行動主義の概念規定をめぐるこの両者の相違は、前者は1930年代、後者は1960年以降という、各考察が立脚した時代状況の相違にも拠るが、考察者の関心の所在と文学観の相違にも拠ると思われる。なぜなら、1910年から1920年までの間、行動主義は政治的な評論や声明文のみならず、理論を反映した文学作品を数多く生み出し⁶⁾、一つの大きな文学潮流を形成したからである。たとえば、クルト・ピントゥス編『人類の薄明』の第三章「行動への呼びかけと反抗」に収められた詩は、大半が行動主義の理念を詩的に実践したものであった。それにもかかわらず、近年の表現主義研究において行動主義を主題にしたり、行動主義的な作品を考察する傾向は多くない。しかし、表現主義の中・後期の運動を、つまり第一次世界大戦中と終結時の文学活動を把握するには、そこに大きな足跡を残した行動主義の考察をなおざりにすることはできない。このような理由から、以下では、II. 行動主義の初期の左派知識人の活動を辿り、III. 行動主義の代表的文学者の活動と理論を分析し、これに基づいて行動主義とはどういうものであったのか、それは表現主義とどのように関わり、その文学にどのような特徴をもたらしたのかを明らかにしたい。

II. 行動主義の前段階：ハインリヒ・マンのエッセイ「精神と行動」と左派知識人たち

激動の1910年代を予告するかのごとく、1911年1月1日にH・マンのエッセイ「精神と行動」(Geist und Tat)が『パーン』誌5号に掲載された。この反響は大きく、作家K・ケルステンは「表現主義の作家の或る集団にとって綱領となるほどの意義を持つた」⁷⁾と語った。実際、その後、間もなく2月20日に『アクツィオン』誌が創刊されたことを考えれば、まさにそのエッセイは「文化闘争を開始する大ドイツ左派(ディ・グローセ・ドイチェ・リンケ)の活動」⁸⁾の幕開けを告げるような作用をした。クルト・ヒラーはそれに続く3月20日にH・マンの要請した「精神と行動の統合」を自らの活動目標にすることを決心し、協力していた『アクツィオン』誌に評論「文学政治」(Literaturpolitik)を発表した。また、同誌の主幹ペンファートも5月22日にH・マンのエッセイについて「反動的な御用作家たちはあのエッセイに良い感情を持っていない。彼らはどうにも歯が立たない敵に、つまり精神の人間(der

Mensch des Geistes) に、文学者に怯えている。我々の最高の作家が煽動者になり、反動的な愚鈍の輩をうろたえさせている。(…) 彼らは H・マンの〈権力や権威を好む人間は我々の敵になるのだ。支配階級に取り入る知識人 (ein Intellektueller) は精神を裏切っている〉という発言を薄笑いを浮かべて聞き流そうとしている。だが、彼らはその言葉がどんな街頭デモよりも手ごわく、脅威であり、革命をも惹き起こす可能性があることを密かに恐れている」⁹⁾と述べた。

そのエッセイは執筆者の H・マンのみならず、それを掲載した『パーン』誌の協力者アルフレート・ケルをも若い文学者たちに模範とすべき活動家として認めさせた。実際、同年 7 月 22 日にヒラーが発表したエッセイでは、「新しい世代を自認する詩人、評論家、とくに理性崇拜者 (Logophilische) の集団」にケルと H・マンが加えられていた¹⁰⁾。また、詩人のエルンスト・プラスは当時のベルリンの文学界について「我々は (知識の芸化と同時に) 精神と芸術の政治化について盛んに議論した。その際、ケルと H・マンは我々の理性に訴え、議論を盛り上げる作用をした。両者は新しい表現者、知識人としても我々の目標となる存在だった。ケルは〈(頭脳) 明晰な詩人〉(helle Barden) を要求していた」¹¹⁾と述べた。ヒラーとプラスにおいて「理性崇拜」、「精神と芸術の政治化」、「(頭脳) 明晰な詩人」など、数年後に行動主義の綱領に頻繁に現れる標語が早くも強調されていたことは興味深い。

さて、大きな反響を呼んだ H・マンのエッセイ「精神と行動」は、「ヴォルテールを行動的知性ゆえにゲーテよりも高く評価した」彼の前年のエッセイ「ヴォルテールとゲーテ」を基礎にして、フランスとドイツの国民および文学者を対比的に二章構成で論じていた。つまり、文学と精神を信頼し、それに拠って行動するフランス国民をその行動的精神ゆえにドイツ国民より高く評価し、「どの国民も精神のために闘う素質を持っていなければならない。つまり、闘う理性 (die Ratio militans) そのものであらねばならない」と説いていた。さらに、「精神の光明を体現したフランスの文学者」とは異なるドイツの文学者には「精神的ではないものを美化し、不正なものを詭弁で擁護し、精神の宿敵である権力のために働いてきた」過ちを指摘し、「今こそ文学者が煽動者となり、国民と同盟を結んで権力に抵抗すること、文学者が自らの言葉の力をことごとく精神の闘争でもある国民の闘争に注ぐこと」¹²⁾を訴えていた。

上述の H・マンのエッセイは「精神と権力の不和が拡大した」ヴィルヘルム二世治下のドイツを痛烈に批判していたために、政府当局から葬り去られようとした。しかし、プェムファートが一年後の 1912 年に「H・マンは勇氣ある急進的な声明を国じゅうに発した。我々はそれによって〈文学が政治に進出する〉という前代未聞の現象がドイツの精神 (die Geister Deutschlands) を奮い立たせることを期待した」¹³⁾と述べたように、「行動する精神」(Tätiger Geist) を生み出す強力な原動力となった。それゆえに、そのエッセイは 1916 年にヒラーが発行した行動主義の年報『目的』^{ツィール}第 1 巻の巻頭にふたたび掲載された。また、ルードルフ・レーオンハルトも論文「革命の精神」(1919 年) で「我々の指導者の一人、H・マンは最初の旗として我々の運動の前方にエッセイ〈精神と行動〉を掲げた」と述べ、その影響が後年のベルリンの「精神的労働者評議会」の設立にも及んでいたことを明らかにした。さらに、1921 年には W・ヘルツォークが彼の平和主義的=革命志向の雑誌『フォーラム』にそのエッセイを掲載し、文学者における「精神と行動の統合」の必要性を繰り返し訴えた。

III. 行動主義の文学者の群像

以下では、行動主義の代表的な文学者クルト・ヒラー、ルートヴィヒ・ルビーナー、アルフレート・ヴォルフエンシュタインの活動と理論を各々の著作をもとに辿ってみたい。

a) クルト・ヒラーの行動主義：精神の寡頭政治

K・ヒラーは1885年にベルリンで生まれ、法律を学んだあと、1908年に法学博士となった。すでにその頃から、学友が「鋭く聡明に輝く眼は慈愛も湛えていた。発言はいつもの確だった。だから、彼はむしろ学者といった感じで、剃刀のように切れる頭脳ゆえに次第に敵対者が増えたが、彼らにとっては付き合い易い人間ではなかった」¹⁴⁾と述べたように、明晰な頭脳と強烈な個性でベルリンの若い文学者たちのリーダー的存在だった。

1909年11月、ヒラーはベルリンで詩人のE・レーヴェンゾーンやヤーコブ・v・ホディスとともに表現主義の文学集団「新クラブ」(der Neue Club)を結成した。この集団は「因習にとらわれた市民階級の生活を芸術や学問を通じて変革し、精神活動によって社会の改良を図ること」¹⁵⁾を綱領に謳っていた。活発な批評活動を展開したこのクラブはやがて「新パトス・キャバレー」を開催し、社会批判を強めながら、退廃しゆくブルジョア文化に対抗した。しかし、早くも1911年にヒラーは会員間の不和を理由に数人の友人とともにそのクラブを脱退し、それと競合する「カバレット・ヌー」を設立した。

まさにその頃、先述したように、ヒラーはH・マンのエッセイ「精神と行動」に触発されて評論「文学政治」を発表した。この評論で彼は「政治は精神の特定の機能方式や形式に従うものであり、世界をただ理解し、享受することには反対する」と宣言し、「精神が哲学、芸術、文学において獲得しようとしているものは、地区団体、新聞論説者、代議士が獲得しようとしているものよりも重要で、真剣で、本質的なものである。(…)今や文学政治は議会政治よりもはるかに優れたものとして評価されるべきである。いかなる場合にも、最高に高まった精神生活を支持し、その集団化を目指し、党派を形成することを高貴なこととして認めねばならない」¹⁶⁾と述べた。

尊敬するニーチェの影響を窺わせる、ヒラーの旧来の価値の転換の呼びかけは、1912年5月に彼が編纂した表現主義の最初の詩集『コンドル』の「序文」にも認めることができる。つまり、彼は『アクツィオン』誌の詩人14名の詩集に次のような「序文」を付したが、その挑発的な発言は多くの批評家の反発を招き、彼とE・プラスは1912年に『アクツィオン』誌で反論を繰り返した¹⁷⁾、いわゆる「コンドル戦争」と呼ばれる文学論争を展開した。

「本書はマニフェストたることを目指す。一つの詩人=分離派 (eine Dichter=Sezession) : 過激な詩の厳選。詩を書いている現在の芸術家、ただ芸術家のみが収集されている。一つの世代の芸術家という一つの像を生み出す試みに適した詩集になっている。(…)本書の詩人たちに共通するのは、古い運動に対抗すること、いずれにせよ新しいものの徴候を示している。(…)精神的な都会人 (geistige Städter) の体験の仕方、単純ではなく、より意識的で、神経質な(発電機や大規模ストライキとは無関係!な)体験の仕方が本書で優先して表れているとすれば、その理由はそうした体験の仕方が他の所でひどくなおざりにされてきたからである」¹⁸⁾。実際、その詩集は当時の文学界の主流から分離した新しい文学集団が伝統に抗する精神的な活動を開始する関の声となっていた。

第一次世界大戦が勃発したあと、物心両面での非常な苦勞、当初の狂信的な愛国主義への幻滅、戦線での夥しい死などを体験する過程で、多くの文学者や知識人は反戦を叫び、平和主義の運動に身を投じるようになった。ヒラーが表現主義の作家たちの急進的な精神運動を行動主義と名付けたのも1914年の終わり頃と言われているが¹⁹⁾、彼も多くの作家と同様に、戦闘的な平和主義者になった。そして、行動主義の運動を本格化させ、自らの活動を組織化するために、1916年に『目標』という表題の年報を創刊した。つまり、彼はその年報を発行することによって（主知主義に走る）「インテリ」との相違を明確にし、精神を目標（Ziel）にして行動への意志を貫く「合理主義」（Rationalismus）を追求しようとしたのである。その年報は1916年、1918年、1919年、1920年、1924年に各一巻が異なる表題で発行されたが、おもに第1巻から第4巻においてヒラーの行動主義の理論の進展と社会への浸透が図られた。

第1巻の『目標——行動的精神への呼びかけ』（Das Ziel—Aufrufe zu tätigem Geist）は1915年の年末に発行されたが、平和主義的な傾向が顕著であったために、発行直後に発行停止の処分を受けた。巻頭にH・マンのエッセイ「精神と行動」が綱領のように掲載されたこの巻には、H・マンやヒラーの理念に賛同した18人の文学者や知識人の評論、社会時評、声明文などが収められていた。それらの掲載物のなかで、たとえば、ハンス・ブリューアーの評論「ブルジョア=タイプの臣下たち」では、H・マンの場合と同様に、時代の権力に追従するブルジョアが痛烈に批判されていた。また、ルビーナーの評論「世界の変革」やエルンスト・ヨーエルの評論「僚友関係」では、精神の人間（die Geistigen）の共同体のみが世界の悲惨な状況を改善することができるという、第一次大戦前に多くの文学者が抱いていた信念がさらに強く表明されていた。そして、巻末にはヒラーの所論「目標の哲学」（Philosophie des Ziels）が掲載されていた。

ちなみに、この第1巻は、古書カタログによると、1916年に第4版の発行を経験しており、当時、行動主義に対して少なからぬ関心が寄せられていたことを窺わせるが、ヒラーの所論「目標の哲学」では、その発行目的とともに、彼の行動主義の理論が次のように説かれていた。「今後の精神の人間（der Geistige von morgen）は断固とした者であり、もはや無能で場外へ下った者とか、口先だけで表明し、傍観する者であってはならない。端役ではなく、主役であらねばならない。（…）諸君は〈芸術的な〉帝国には目もくれない。諸君の精神は贅沢品でも偏狭な自己中心者の浸出物でもない。その精神は生存を指揮する精神である。諸君は演説家、教師、啓蒙家、煽動者、同盟設立者、立法者、予言者である。諸君は考察することではなく、事態を惹き起こす（bewirken）ことを望む。精神が目標なのだ（Geist ist Ziel）。諸君は〈知識人〉と非難されることはない。今後は〈意志を持つ人〉（Willentliche）が諸君の名誉ある呼び名であるべきだ！（…）精神の人々よ、同盟を結ぼう！私はこの発光信号弾を（まだ戦争が猛威を振っている）諸君の空へ向けて投げよう。我々が数十年も前から考えながらも、まだ実現を見ていない事象がついには現れるために同盟を結ぼう！我々は何を望むのか？楽園を。誰がそれを勝ち取るのか？精神が。そのために精神は何を必要とするのか？権力（Macht）を。いかにして精神は権力を獲得するのか？団結によって！」²⁰⁾。

この所論で注目されるのは、先述のH・マンのエッセイやE・プラスの回想でも認められたことだが、「インテリ」（Intellektuelle）への否定的評価に対して、「精神の人間」（die Geistigen）への肯定的評価が明確に示されていることである。こうした対照的評価は、当時のドイツの文学者や知識人に稀なことではなかった。

ちなみに、「Intellektuelle」という語はドレフュス事件のフランスで初めて用いられたといわれるが、そこでは公共の要件に知識人が関わり、ついには文学者や出版人として国家の政治的変革に関与し、それに対して責任を持つという意味を持っていた。H・マンが要請した「精神と行動の統合」の成功例がまさにドレフュス事件をめぐるフランスの文学者たちに見られたのである。しかし、「les intellectuels」という語はフランスでも当初、それらの文学者に敵対者たちが浴びせた軽蔑の語だった。そうした状況の中で、自分の行動を信じたフランスの文学者たちは敵対者たちの揶揄を逆手にとり、その語を肯定的な自己名称としたのである²¹⁾。これに対してドイツでは、先述のH・マンの「支配階級に取り入る知識人 (Intellektueller) は精神 (Geist) を裏切っている」という発言のみならず、表現主義の作家O・フラークのように²²⁾、その語にフランス文化の優位性を感じ取り、拒絶的な対応をした例も数多く見られ、その語にはたいてい否定的なニュアンスが付きまとった。こうした事情から、ドイツでは知識人を表す場合、「精神的人間」(geistige Menschen)、「精神者」(Geistige)、「精神の人」(Geistesmenschen)、「精神的創造者」(geistig Schaffende)、「精神の貴族」(Geistesadel)、「精神労働者」(geistige Arbeiter)など、「精神」(Geist)という語が好んで用いられた。

ヒラーによれば、精神 (Geist) は芸術の帝国、つまり審美主義には関心を持たず、ひたすら現実を直視し、現状を改善することによって人間がより幸福に生き得る社会、つまり楽園の実現に邁進する。そのために精神は権力 (Macht) と結びつく。つまり、ヒラーにおいて精神 (Geist) と権力 (Macht) は対立するものではなく、ともに協力して楽園の実現を目指すのである。それゆえに、「精神の行動家」として演説家、教師、啓蒙家など、いわゆる社会のエリートが想定され、知識人の権力掌握、精神の独裁、つまり精神の寡頭政治が高貴なこととして推奨された。

こうした考えから、H・マンの「精神と行動の統合」は、ヒラーの場合、精神 (Geist) と実践 (Praxis) の統合としても捉えられ、その関係は次のように説明された。「精神と実践はかつては相反するものであった。だが、今日、両者は相互に関係し、依存し合っている。つまり、精神は目標を立て、実践はその目標を実現する。(…) 実践は精神の手足であり、精神は実践の頭脳である。実践は野戦軍、精神は軍司令官。両者は相互に依存関係にあり、一方は他方を欠くことはできない」。彼の論拠で精神と実践がそれぞれ軍司令官と野戦軍という軍隊組織に喩えられていることも、彼の行動主義が権力と結び付いた党派性を特徴としていたことを窺わせる。

第2巻の『行動的精神! 目標=年報・第2巻』(Tätiger Geist! Zweites der Ziel-Jahrbücher) は1918年夏に発行されたが、これも発行直後に発行停止となった。この巻は頁数が第1巻の二倍に及ぶほど浩瀚であり、行動主義を支持する作家や理論家の評論、声明文が三十数編収められていた。それらの掲載物に特徴的なのは、大戦が終結に近づいていた時期ということもあって、ヒラーのほか、彼と親交があったカール・マリーア・ヴェーバー、ルビーナーなど行動主義の旗手と言われた文学者の発言で「政治的な詩人」(der politische Dichter) の出現が強く要望されていたことである。

続く第3巻『目標——精神の政治のための年報・第3巻』(Jahrbücher für die geistige Politik, Jahrbuch III) と、第4巻『目標——精神の政治のための年報・第4巻』(Viertes der Jahrbücher für die geistige Politik) は、表題、編集者、発行所が同一であるうえに、第3巻に「第1分巻」(1. Halbband) と記されていたことから、両巻で一巻を成す構成になっていた。

この両巻では、第一次大戦の終結後に一つの政治的綱領に発展した行動主義の理論の数々が提示されていた。つまり、その両巻に収載された多くの評論では「精神の政治」(geistige Politik)を実現するための諸条件が具体的に論じられていた。なかでも、ヒラーが構想した行動主義の文学者の同盟である「目標=同盟」は、彼の指導のもとで「精神の労働者」(geistige Arbeiter)の政治的評議会(politischer Rat)の設立を目指し、さらにその評議会では精神が支配する平和主義的な社会共和国(soziale Republik)の樹立が目標にされていた。

そして、第5巻の『精神の政治! 目標=年報・第5巻』(geistige Politik! Fünftes der Ziel=Jahrbücher)は第4巻の発行後四年を経た1924年に発行されたが、頁数が第1巻の八割程度に減少していた。さらに、編集後記では「以前の四つの巻に協力し、我々と同じ基本感情と目的意識を持って闘ったが、もはや生存せぬ同志の思い出に捧げる」と述べられ、ルビーナー、オットー・ブラウン教授、アルフレート・レム、ヘートヴィヒ・ドーム女史、カール・ガーライスの名前が挙げられていた。したがって、この第5巻はヒラーが自らの運動の終焉を告知し、行動主義の活動の総決算を意図した発行であったと言える。

以上に見た全五巻の年報には、合計73名の文学者や思想家の合計121編の評論や声明文が掲載されたが、その内訳はヒラー14編、R・レーオンハルト6編、R・カイザーとオーストリアの行動主義の代表者R・ミュラーが各4編、H・マン、L・マティーアス、C・M・ヴェーバー、A・T・ヴェーグナーが各3編、その他の執筆者が各1編ないし2編となっていた²³⁾。この掲載状況から、その年報について少なくとも次の三つの特徴を指摘することができる。1) ヒラーはそれによって自らの理論の進展と社会への浸透を目指していた。2) 各巻に多数の執筆者(=文学者や知識人)を登場させることによって、行動主義への関心の高さを社会に示すとともに、運動のさらなる拡大を期待していた。3) たとえば第2巻にFr・ヴェルフェルの「キリスト教者の使命——クルト・ヒラーへの公開状」を掲載したように、ヒラーへの質問や反論も掲載することによって、自由な批判と活発な議論を歓迎するフォーラム的性格を保持していた。つまり、年報を行動主義の理論の発表の場としていたが、各所論に敢えて統一を求めようとはせず、むしろ自由で活発な討論を歓迎していた。そして、この姿勢には、自らの信念に拠って行動する「知識人のあるべき姿」、「真実の陳述の重視」が明確に示されていたとも言える。

b) ルートヴィヒ・ルビーナーの行動主義：同胞愛と共同体

L・ルビーナーはヒラーとともに行動主義の旗手と見られていたが、年報『目標』には第1巻と第2巻に各1編の評論が掲載されていたにすぎない。この背景には、彼の理論がヒラーの理論とかなり相違していたという事情があったように思われる。

ルビーナーは1881年にベルリンでガリツィア出身のユダヤ人の家庭に生まれ、1902年から1906年まで大学で哲学、音楽学、美術史、文学などを学んだ。この学生時代に彼は自由学生組合(Freie Studentenschaft)に加わり、文学部門長などを務めた。その学生組合は1890年代に既存の学生組合に対抗して設立されたものであるが、同級だったW・ヘルツォークの回想によると、ニーチェの影響を受けて、おもにブルジョア的価値観に抗する活動を行っていた。彼が当時、それと並行してベルリンのボヘミアンやアナキストの集団と交流したことも、その学生組合の活動理念に沿った行動であった。こうした状況の中で、彼は無政府主義的な理想社会の実現を目指して1900年にベルリンに設立された「新共同体」(Neue Gemeinschaft)と

も関わるようになった。その後1908年には、彼の行動主義の理論を形成する上で重要な役割をした「演劇の政治化」(Politisierung des Theaters)を推進する運動を開始した。その運動は、1919年初めにベルリンで「プロレタリア劇場」が開設されたことでようやく成果を見たが、そこで実践されたプロレタリアを主体とした集団主義は、ルビーナーの行動主義の基本理念である同胞愛と共同体の追求の基礎となるものであった。

1908年からルビーナーはロシア、オーストリア、スイスなどを旅行したが、1911年に『アクツィオン』誌の創刊に協力したあと、住居をパリへ移した。パリでは詩や評論を数多く書いたが、その代表的なものは、1912年に『アクツィオン』誌21、23号(5月22日、6月5日)に掲載された「詩人は政治に手を突っ込む」(Der Dichter greift in die Politik)と題する評論だった。それは、表現主義の作家Fr・ユングが「当時、我々全員が感じていたことをきわめて的確に表現していた」²⁴⁾と語ったように、たちまち多くの文学者に共感を呼んだが、文学者が政治に関わる意義を次のように述べていた。「政治とは我々の道徳的意図(sittliche Absichten)を公にすることである。(…)私は道徳的な生の目標(ein sittliches Lebensziel)だけがあることを知っている。(…)私は、発展など存在しないことを知っている。量の集積は(人間において)その集積の動機を変えるものではないことを知っている。量は増加によって質にならず、我々の文明だけが進歩することを知っている。文明とは我々の倦怠感を逸らすためのテクニックであること、文明は克服すべきものでも追求すべきものでもなく、現に存在しており、我々を包圍、束縛、拘束するが、決して支配するものではない。(…)人間生活のなかへ一瞬、激烈(Intensität)をもたらすこと、つまり衝撃、驚愕、威嚇のなかで共同体に在る個人の責任感を自覚させること、それが道徳的な生の目標である」²⁵⁾。

この評論に多くの文学者が触発され、行動主義への意志を表明することになった。たとえば、表現主義の評論家R・カイザーは1918年に「物質のために、その技術と方法のために抑圧されている我々は、人間が世界を引き受け、人間が世界を形成するような、あの倫理的な理想主義に向かってふたたび奮い立たねばならない。ルビーナーはそうした告知者であり、新しい時代の旗手、新しい人間性の開拓者である」²⁶⁾と述べた。

しかし、その評論では、具体的な社会問題や現実政治ではなく、精神を欠如した文明、量の増加でしかない物質主義、社会に蔓延した進歩信仰などがおもに批判されていた。つまり、ルビーナーにおいて「政治に手を突っ込む詩人」は、物質文明や合理主義に抗する道徳的な生の指導者として捉えられていた。それゆえに、その詩人はマルクス主義にも労働運動にも一定の距離を置く存在であり、「我々の仲間は売春婦、詩人、売春斡旋業者、紛失物の蒐集狂、こそ泥、大酒飲み(…)無頼の徒である」と述べられてたように、ブルジョアやプロレタリアートとは無関係の第五身分フンペンプロレタリアート(浮浪無産者)の同志であった。この点でも、ルビーナーの行動主義は、活動の主体を社会的エリートに限定したヒラーの行動主義とはかなり異なっていた。

その後1915年に書かれた評論「世界の変革」(Die Änderung der Welt)では、行動の目標が次のようにより明確にされていた。つまり、「我々は皆、世界改良者であるように。(…)我々は政治家であるように。(…)我々の地球のすべての人間に責任を持とう」²⁷⁾と呼びかけられ、「世界のあらゆる変革は、精神を世界へ投射すること」であり、人間中心的な意識と(マルクス主義の〈万人の平等〉ではなく)「万人への責任」を自覚したグローバルメンタリティーの保持が要請されていた。

このような理念は、彼が1917年に著した『中心にいる人間』(Der Mensch in der Mitte)

でさらに深められ、「序文」では「神のごとき計画」(göttlicher Plan)へと理想化されて、次のように説かれていた。「人間は世界の中心である。人間が世界の中心であるように!人間のもっとも強い要望は、〈中心にいる人間〉である。それはきわめて偉大な正当を、きわめて偉大な自由を、きわめて偉大な直接性を、きわめて偉大な人間性への接近を、きわめて偉大な愛を求める叫びにほかならない。(…) 諸々の理念の交流は生の抗争ではなく、生の前奏である。諸々の理念のより気高い統合によって精神の創造性が現れる。そして、その実現は諸国民の地球規模の統合に至る。もはや国籍を抛らず、理想性によって地球を区分することが結局のところ我々に課せられている」²⁸⁾。

この行動主義の理論書を著したあと、ルビーナーは反=軍国主義的な亡命雑誌『時代=反響』(Zeit-Echo)の第3巻(1917年)以降の編集を担当した。それを契機にその雑誌は急進的で社会主義的な反戦=闘争誌の性格を持つようになった。彼はそれについて「雑誌は書誌学的なものではなく、倫理的なものである。(…) 雑誌は、自分の人格を完全に自分たちの問題と一致させる心構えを持った、最後の絶望的な人間の行動を捉え、提示する場合にのみ、生存権を持つ」²⁹⁾と述べて、自分の行動の責任と道徳的意志を表明していた。彼は5月号の掲載記事をすべて単独で書いたが、それらは「芸術批評をするのではなく、世界における精神の人間(Geistige)の今日的かつ実現可能な発言を記録する」という前提に立っていた。

その雑誌に掲載された評論「世界の同胞」(Mitmensch)では、ルビーナーの共同体理念がロシア革命と関連付けて次のように詳述されていた。「精神的行動(eine geistige Tat)が何かは、今日もはや不確かではない。(…) それは、ある国民の行動によって我々に明らかになっているからである。その国で起こったことは〈出来事〉ではない。つまり、より新しい事件や別の出来事に凌駕されるような事件ではない。真の行動(Tat)なのだ。象徴的意味のない、副次的意味のない行動なのだ。精神のためにきわめて深く長く振動し、決然とした蜂起(Erhebung)から生まれた行動なのだ」と述べられていた。

「その国で起こった真の行動」とは1917年2月以降のロシア革命を指しているが、ルビーナーはそれに関連して「自分たちの法律が兄弟愛(Bruderliebe)で制定されているのを見た、その真の義勇兵たちは、理念の実現に力を尽くした。(…) 彼らはただ自分の良心への信頼に、無条件の献身への堅い意志に、自分の理念の将来の実現への信頼に、地上で精神が甦るという信念に支えられていた。彼らは世界の同胞(Mitmenschen)の神聖さ(Heiligkeit)を信じる心に支えられていた。(…) 精神が消滅することはない。精神は各個人に、小集団に、目覚めた人間に、人間らしい自由を知っている人間に繰り返し現れる。また、精神の欠如した権力と和解せず、殉教者のごとく誹謗され追放され、苦しみきわまる死のなかでも自分を理念の子供だと誇らしく宣言する人間にはっきりと現れる。(…) 無秩序というこの新たな秩序を前にして、自分の良心を、自分の道徳的素質を意識する時だ。精神的なものへ無条件に専心する自分の情熱を、同胞の理念のために意志を固める自分の力を意識する時だ」³⁰⁾と述べていた。この同胞愛の理念は、同じ時期に書かれた「天使たち」や「ご高配を!」などの詩にも詠われていた。

1919年、ルビーナーはポツダムのG・キーペンホイアー出版社の編集者になり、文学者として社会参加を実践する機会を得た。そこで彼が芸術と政治の統合を目指して心血を注いだ企画は、次の二冊のアンソロジーの編纂であった。その一つはベッヒャーやシッケレなど行動主義的な詩人の戦中、戦後の詩を収集した詩集『人類の盟友』(Kameraden der Menschheit)で

ある。他の一つは近世以後の数々の転換期に書かれた思想家、芸術家、政治家の理念表明文を「精神的転換期の記録」として集成した論集『共同体』（Die Gemeinschaft）である。

『人類の盟友』は「世界革命のための詩集」と銘打たれたが、「1914年以降、国際社会主義の闘争で公然と態度表明したフランスの3人の詩人の4篇」を含む合計75篇の行動主義的な詩が「諸国の同志」、「戦争停止」、「準備」、「蜂起」、「赤の一群」、「人類の盟友」の六章に分けて編纂されていた。そして、「あとがき」では、各詩で詩人とプロレタリアの協同が見事に実現している状況が次のように強調されていた。「本書に収められた詩は、どれもみな旧い世界に対する闘い、社会革命の新しい人間の国に向かう行進に寄せる各詩人の信条表明である。（…）詩の選択は人間的な態度決定を表明しているという条件に従っており、〈純芸術的価値〉の見地から行われたのではない。我々は、〈純芸術的価値〉などは不純で無価値であることを知っている。なぜなら、芸術家美学とはブルジョアの思考体系であり、共同体のための闘争を志向するあらゆる決定的な方向からの逃避を正当化するためのものであるから。（…）革命的な詩人の行動とは、新しい精神的建設の宣言であり、革命的連帯と共同体の自由と社会的正義の宣言であった。（…）本書の各詩はみな、共同体の目標のためにささやかな貢献をする。（…）今ようやく、詩人はプロレタリアの側に歩み寄る。プロレタリアは経済上の過去としての資本主義から世界を解放し、詩人は感性上の過去としての資本主義からそれを解放する」。

次に、『共同体』はドイツ革命に参加した表現主義の文学者を初めとする急進的な芸術家、芸術理論家たちの根本理念を代弁したものと言えるが、「あとがき」では、次のようにまともグローバルな同胞愛が説かれていた。「自分が地球の民族であることに気づいた大衆とは、地球に関わる決定に参加しようという意志を持つプロレタリアートのことである。（…）彼らは世界の中心にある人間であり、地球の共同体は人間のために労働する。（…）この若い世代は、目標のために全精神を捧げ、きわめて現実的な闘いを実行しながら、旧い文化と決別した。彼らは自分の運命を共同体のために捧げる。（…）我々にとって永遠なるものとは、創造者、つまり人間にほかならない。地球をめぐる闘争は人間のためにこそ行われているのだ。（…）そして、彼らは、その他の同胞と共に在り、これらの人々もまた自分の兄弟であり、同じように地球から生まれたのだという意識を持たねばならない」。

c) アルフレート・ヴォルフエンシュタインの行動主義：精神の興起と友愛の希求

A・ヴォルフエンシュタインはハレのユダヤ人の家庭に生まれ、ベルリンで法律を学んだ後、フリーの作家として活躍した。第一次世界大戦中は表現主義の代表的詩人の一人として多数の詩や小説を書いたが、そこには早くも彼の人生と同様に矛盾に満ちた特徴が表れていた。つまり、ニヒリズムを色濃く留めた作品が書かれると同時に、共同体、友愛、ユートピア的世界を希求する作品も書かれた。この後者の傾向と関連して、彼において行動主義の運動に加わる決心が生まれた。彼はそれ以前からヒラーヤルビーナーと交流を持っていたが、年報『目標』には女性解放を訴えた評論が1編掲載されたただけであった。つまり、ヴォルフエンシュタインの行動主義はヒラーヤルビーナーの理念とはいささか異なり、生活苦に喘ぐ民衆の救済と反戦を主眼としていた。おもな活動は1919年に創刊した『興起——新しい文芸と評価のための年報』（Die Erhebung — Jahrbuch für neue Dichtung und Wertung）の編集・発行であった。この年報は、第一次世界大戦の終結と同時に高まった表現主義の終焉論に対抗し、運動の興起を訴える意図から創刊されたために、「前宣伝」で次のように発行の意義が強調されていた。「この年

報は平和の始まる時期^{とぎ}に発行される。しかし、平和もこれまで戦争に次第に深くはまり込んだのではなかったか？精神的な力（die geistige Kraft）が戦争にも平和にも転換をもたらすべき時に来たのだ。新しい芸術のきわめて建設的な使命が今ようやく始まる。新しい文学と精神性（Geistigkeit）は確かな真実の創作によって広範な影響力を獲得せねばならない。（…）この年報は固定観念を持った時代が刷新の道を学び得るような使命を持たねばならない。この年報は言葉と態度で、誤謬のみならず圧迫をも強める現実^{しんじつ}に反抗する。この年報は地上で進行する偉大な運動の神髄に近づき、同盟を結び、襲い来る硬直化に最初から抵抗することを自覚する。高まる倫理感の純粹かつ鋭敏な表現であり、既存のものに従うのでも、神聖なものに尊大な態度をとるのでもなく、自ら立ち上がること（Erhebung）を目指す。これは精神が高められる（erhoben werden）場所であり、自ら立ち上がる（sich erheben^{しるし}）表示であり、きわめて人間的な反乱と精神の高揚である。（…）人間はきわめて行動的で、決して硬直化せぬ純粹な現実であらねばならない。人間は変化しつつ、真摯に自分の頭を起こす。この年報はそうした人間の新しい姿勢を確立することを支援し、地球の広域で崇高（überirdisch）な行動をする人間を我々の眼前に示す。こうした仕事は、とりわけ精神の興起（Erhebung）を目指す年報にふさわしい。友情や人間的創造をとめどなく引き裂くカオスの真ん中でさまざまな人間をより気高くより強い団結へと導き、高い志を持った共同性（Gemeinsamkeit）という新しい世界の模範を創るべきである。そうした集団が生み出した物と作用が偉大で人間的な労働集団（Arbeitertum）のものとなるように！」³¹。年報の表題に掲げられた精神の高揚、蜂起、運動の興起（Erhebung）の理念は、彼が第一次世界大戦中に書いた「表出の幸福」、「仲間よ！」などの詩にも謳われ、まさにヴォルフエンシュタインの行動主義の神髄となっていた。

このように、年報『興起』は第一次大戦終結後の世界と人間のあるべき姿を提示し、精神の興起を願って創刊されたのであるが、わずか二年の発行に終わったからであろうか、フリッツ・シュラーヴェ著『文学雑誌 1910-1933』³²にも記載がなく、それゆえに行動主義の活動として言及されることは稀である。しかし、1919年発行の第1巻は「抒情詩」、「戯曲」、「説話」、「アピールと評価」の四章に、また1920年発行の第2巻は「抒情詩と散文」、「戯曲」、「評論」の三章にそれぞれ分けて編集されていたなかで、第1巻の「アピールと評価」では14名のうち8名が、また第2巻の「評論」では15名のうち7名が先述の年報『目標』にも掲載された文学者であった。この状況から、年報『興起』が「新しい評価」（Neue Wertung）と捉えて掲載した評論の半数以上は行動主義の理念を説いたものであったと言える。

第1巻の巻頭に掲載された「新しいもの・序文」（Das Neue・Ein Vorwort）では、ヴォルフエンシュタインが追求した「新しいもの」について次のように説明されていた。「この地上に溢れる人間、大衆（Masse）を愛する者だけが今後は自ら人間を意味することになるだろう。なぜなら、そういう者のみ^{しるし}がそもそも愛するということができるのだし、それが新しい表示であるからだ。（…）人間を動かすのはただ人間性の作用だけである。（…）人間的なものの翼にこの世界を乗せて浮遊させる新しい活力の到来が新しい芸術のなかに告知された。それは芸術家のみという限定を突き破り、万人に次のような意識を植え付け、万人の天性にしようとする。つまり、世界は征服されるのではなく、新たに創られるもの^{しるし}だという意識を持つのである。新しい芸術はこれまでとは異なる面から生じる新しい人間性によって勝利を得る。この勝利は新しい芸術のなかに人間全般の勝利として表現されるが、それこそが調和というものである。世界中の人間はみな兄弟だという意識を持った芸術は、もはや利己的でロマン主義的ではない。

(…) 芸術家のロマン主義的な自己完成ではなく、新しい世界を創るために人間を高めること (Erhebung) がこの芸術の意図するところである。新しい文学は、人間の生を共同の神的な存在 (gemeinsames, göttliches Wesen) へ発展させるような活力を持つことを願っている」³³⁾。

この「共同の神的な存在」は、第1巻の「アピールと評価」の章の最初に収められたヴォルフシュタインの評論「人間的な闘士」(Der menschliche Kämpfer) で具体的に示されていた。その評論は四行九詩節の韻文の前半と、この八倍ほど長い散文の後半から成っているが、前半では聖書の「天地創造」にも似た人間世界の原初の風景が次のように詠われていた。「夢が立ち上がり、苦しみの内奥から／地上の新しい星の光が現れる！／世界の夢見る者たちよ！そのとき、夜は拡大も空しく、収縮に向かう。／一度も存在しなかった世界の労働者たちよ！世界を創造する者たちよ！／我々から創造が、人間世界が生まれ出る！／／(…) 一吹の風が暗闇から訪れた、世界が始まった時のように。そして、反響する音は万物と共鳴して広がる、創造が始まった時のように！最初の暗闇が我々をふたたび包んでいる、あたかも神だけが在るかのよう、あたかも神が無、依然として無であるかのよう。大地は形なく空しい。精神の音響がその上を鳴り渡る。その音響からは〈おまえたちは新たな創造をするのだ！まず、神を強大にするのだ！〉という無私の声が広がる」。この詩篇では、人間が共同の神的な存在であった原初的世界を甦らせる意図から、「大地は形なく空しい」(Die Erde ist wüst und leer) を初めとして、「創世記」の語句や文章が随所に現れている。

そして、このあとに続く散文では世界の人間の統合、同胞愛が次のように説かれていた。「過去の数千年と神々は、戦争と平和という、二重神に服従していた。その間、地上に多くの人間が在るといふ重い意味はいつも曖昧にされた。この世界にはただ一人の人間が在るのではないという、重要で素晴らしい偉大な事実の意義はいつも敵対状況へ至るか、または(精神と無縁の)安逸状況へ至るかであった。人間は何度も自分から活力ある解決策を奪った。その二つの状況はともに無に通じる！つまり、それは、多くの人間が安逸のなかで自己へ沈潜する沼地へ至るか、または一個人や一民族が他のすべての人間や民族を食わんとし血塗れの奈落へ至るかである。(…) その両方とも、苦闘する我々の生が追求する永遠の目標を、つまり人間の天上のごとき統合 (die himmlische Vereinigung der Menschen) を損なうものである。人間の天上のごとき統合ではなく、すべての人間の衝突、血塗れの苦痛を生むか、または安逸のブルジョア化 (Verbürgerung) というお粗末な戯画を生むかである。戦争と平和の失敗から、人間存在の新たに奇形した姿がカオスの縁の向こうに繰り返し現れる。(…) 人間にとって現実の外的不いし内的な事物からではなく、他の人間の多様な世界から成り立っている。人間はこうした同、不同の領域を考慮せねばならないのに、これを考慮することができないのだ！人間の意志の光の交差 (Sternenkreuze) は無数の目から輝き出ているのに、それはどの天球儀にも書き込まれていない。(…) 活力ある人間的な解決は、全空間を自分に要求する野心的な破壊者によっても、一空間を慎ましい生活で満たす行動なき人間 (Unbewegte) によっても得られず、空間的なものと時間的なものを超越した人間によって実現される。(…) 絶えず新たに変化する人間 (Erneuerer Mensch) だけが終わりのなき生を可能にできる。(…) そのような人間は、世界を(征服ではなく)創造する革命家、人間的な闘士 (Der menschliche Kämpfer) である」³⁴⁾。

そして、「純粹に人間的な闘士」と認められる詩人の生と芸術は次のような機能と意義を持つ。「生と芸術の新しい統合は、芸術は自然によって規定されるとする過去の通念からではな

く、芸術の創造は生の創造になるという現在の信念から成立する。(…)新しい詩歌は活力の大洋によって、芸術王国を自分のために創る詩歌とは区別されるべきである。芸術は現実のために在るのでもなく、芸術のために在るのでもない。人間は、芸術の本性を發揮しようとする芸術を期待することができる。つまり、天空を去り、時代のなかに舞い降り、鷲のようにふたたび永遠に向かって上昇する反乱的な詩歌 (ins Ewige erhebende empörenderische Dichtung) を期待することができる。(…)それはかつて以上に直接、芸術の未来的な特徴となる。つまり、生は行動的なものであれという偉大な記憶の叫びである。過去の諸芸術とは異なり、その形式にまでこうした倫理感が浸透して鳴り響く芸術の発する叫びは、人間を呼び覚ますことができる。そして、それは人間の行動によって現状の愚鈍な右旋回が見事に制圧されるように働くのだ」。

こうした信念を持った「人間的な闘士」は、ヴォルフエンシュタインの詩で「仲間を愛する者たち」(Freundesfreunde)、「地球の仲間たち」(Kameraden der Erde)、「神の仲間たち」(Gottes Kameraden)、「敵を愛する者たち」(Feindesfreunde)、「精神に没頭した優しい者たち」(Zarte, … in Geist Versogne)、「神性の青に跪く明晰な者たち」(Klare, … vor der Gottheit Blauen Niedersinken)³⁵⁾と、さまざまに表されていたが、この理想像の集約が彼の行動主義の本質であったと言える。

IV. 行動主義の評価と総括

行動主義はおもに年報『目標』を通じて当時の文学者や知識人に浸透したが、その活動や理論をめぐっては多くの疑問や批判も生み出した。以下では、その主要なものを紹介し、そこに共通して表れた「文学と政治の関わり」、「文学者の社会参加」^{アンソージョマン}をめぐるとの認識状況などを見てみたい。

1916年3月、テーオドア・ホイスは「文学者の政治化」と題する論文を発表し、当時、多くの(行動主義の)声明文に見られた主張の空疎と激情の優勢に態度留保を示しつつも、その運動の文学的意義を次のように認めた。「文学者は具体的な目標や目的と結びつき、それを契機に個人を超えた社会の責任領域に入っていく。(…)文学者を審美的評価や自己享乐的な懷疑の散歩道から呼び戻し、理念のための、倫理的評価のための、公的正義のための、(私の場合は)理性的なもののための闘いへ誘ったことは、それによって考察者(Betrachtende)が行動者(Tätige)へ変わることができたかぎりにおいて賞賛すべきことである」³⁶⁾。

これに対して、トーマス・マンは同年11月にアイヒェンドルフの短編小説『のらくら者』を批評する形でヒラーと行動主義を痛烈に批判した。その論文は縮小、変更されて『非政治的人間の考察』の「美德について」の章に収められたが、そこでは次のように述べられていた。「政治的形態をとった美德の蘇生、感傷的=恐怖政治的、共和制的な刻印を帯びた道徳の専制支配の復活、要するにジャコバン党員の復活、こんなことがふたたび起ころうとは夢にも思わなかった。(…)文学と政治が綯い交ぜになり、一方では精神が政治化して、それによって真理、自由、正義、人間性など、あらゆる偉大な抽象概念が究極的かつ最高の道徳的・哲学的問題であることを止め、純粋に政治的な意味を持ち、もっぱら国家的、社会的なものに関係づけられ、さらには個々の概念の定義は留保し、すべてを一括して急進的な共和制を意味するとされ、他方では政治が文学化して、心を高邁にし、人間に追従し、〈人類〉に敬意を表する雄弁

術の性格を帯びるのである」³⁷⁾。

上記の Th・マンの批判文が『ノイエ・ルントシャウ』誌 27 号に掲載された後、続く 28 号に Fr・ヴェルフェルの「キリスト教者の使命——クルト・ヒラーへの公開状」が掲載された。そこでヴェルフェルは行動主義を芸術と対抗する運動として捉え、「行動主義とは文学の政治化、さらに言えば、若者たち全員の政治化を主眼とするような一つの綱領のことである。それは、各人が孤独から抜け出し、自己の魂に関わる仕事を中断して、自分の力と時間をすべて社会変革の仕事に捧げることを求める闘いの叫びである。(…) 行動主義の政治とは、万人の幸福を実現し、万人の間に正義を打ち立てるために権力を得ようとする努力であるが、それは、自我にまつわる個人的かつ非社会的な要素をすべて断念することによって達成される。それゆえに、芸術、つまり他へ作用しない精神を排除しようとする」³⁸⁾と断じた。そのあと、彼は「神を信じるといふ信仰の尺度も人間の現実感覚の緊張度に基づくものであるから、キリスト教者の使命は人間をふたたび容赦なく現実へ連れ戻すことであるが、その人間を現実へ連れ戻す使命は、結局のところ（行動主義が人間の自己陶醉を誘うとして非難する）芸術の使命、つまりポエジーの使命と完全に一致する」と反論し、ヒラーの行動主義の芸術論の根本を質した。

行動主義 (Aktivismus) はその名称が示すように、「文学者や芸術家が自己認識した責任に基づいて社会のために行動する」ことを基本理念としていたが、活動には次のような特徴が認められた。1) 声明や理念の表明がおもに年報や雑誌を通じて行われたことから、理念と活動に統一性と集団性が存在したように思われがちであるが、行動主義の双壁とされたヒラーとルビーナーの理念と活動に相違が見られたように、各々の動機、関心の対象、理論は決して統一ではなく、したがって集団性は見られなかった。2) 行動主義はしばしば左派知識人の活動として捉えられたが、当時の左派政党を公式に代表した SPD とは関係を持っていなかった。つまり、それは現実政治には直接、関与しない、信念 (Gesinnung) の運動にとどまっていた。3) 行動主義の信奉者は自分をマルクス主義とは無関係の社会主義者と認識し、急進的な「精神の活動」を目指していた。彼らに共通した特徴はユートピアの追求であった。

行動主義はとりわけ第一次世界大戦という危機的な時代状況と密接に関連して生じた精神的活動であったために、大戦の終結と同時に発生した次のような歴史的変動の波にのまれて衰退せざるを得なかった。つまり、1919 年 1 月、ベルリンで起こった（文学者も数人加わった）革命軍の蜂起が敗北に終わった。続く 1920 年にバイエルン＝レーテ共和国で革命軍の流血の惨事が生じた。さらに、同年には「カッパー揆」において、行動主義の信奉者は革命の挫折を痛感する事態に直面した。こうした歴史的現実を目の当たりにして、「精神の政治家」の戦線はついに解散を余儀なくされ、『目標』と『興起』の両年報も発行を中止し、実際的な活動を停止した。

しかしながら、行動主義の闘士たちを道徳的行動へと駆り立てたものは何だったのか？彼らが精神を旗印にして自らの時代と社会の中へ突き進まざるを得なかった状況は、E・ブロッホが 1918 年に記した『ユートピアの精神』の「意図」に表されているように思われる。すなわち、「今や我々は始めねばならない。生は我々の手に与えられている、生それ自体はとっくにもう空虚になってしまった。生は意味もなくあちこち彷徨っている。だが、我々はしかと立ち、生のためにその拳となり、その目的になろうと思う。今あったものはやがて忘れられてしまうことだろう。空虚な忌まわしい思い出だけが宙に漂っている。守られたのは誰か？怠惰な者、

ろくでなし、暴利をむさぼる者が守られた。若かった者は戦死せねばならなかったが、低劣な者は救われ、暖かい部屋に座っている。その連中の誰一人も死ななかった。(…)凡庸な連中に命じられ、凡庸な連中に維持された息詰まる強制。愚昧の勝利。それは憲兵に護られ、いくら頭をひねっても月並みな言葉一つ捻り出せないインテリに歓迎された。(…) そうなったのも、我々が社会主義的な考えを持っていないからだ。むしろ我々は温まった輩よりも貧しくなった。食うことに困らぬ人間には国家が神である。他のすべては冗談や娯楽に成り下がってしまった。(…) 我々は憧憬と当面の知識は持っているが、行動は乏しく、(また、その乏しい理由の説明にもなるが) 広がりがなく、展望がなく、目標がなく、いずれ踏み越えると予感する内面的な闘がなく、ユートピアの原理の概念がない。ユートピアの原理の概念を見出すべく、そのために生き、組織され、時間を使うに相応しい正しきものを見出すべく、我々は進み、空想の建設的な道を拓く。存在しないもの呼びかけ、空中に楼閣を築き、架空に自らを打ち立て、事実のものが消え失せる所に、真なるもの、本当のものを探し求める——新しき生ここに始まる」³⁹⁾。

実際、行動主義においても、人間が自ら創り、それゆえに関わらざるを得なかった社会と時代状況のさまざまな局面で、その現状を超克するべく新しい生と世界を求めて、真摯な模索が繰り広げられていた実態が浮かび上がるのである。

註

- 1) „März“ (1907-1917) は H・ヘッセが編集を担当していた当初は文学作品を重点的に掲載していたが、1913年に左派知識人 W・ヘルツォークが編集を引き継いでからは、表現主義的な作品や急進的な評論を掲載するようになった。そして、とくに Th・ホイスが主幹になった 1914 年以降は、もっぱら政治的の記事を掲載し、ドイツ国内のショーヴィニズムに対抗した。
 - 2) René Schickele: Wie verhält es sich mit dem Expressionismus? In: Paul Raabe (Hrsg.): Expressionismus. Der Kampf um eine literarische Bewegung. Zürich 1987, S. 178.
 - 3) Ivan Goll: Der Expressionismus stirbt. In: Paul Raabe (Hrsg.): op. cit. S. 180 f.
 - 4) Wolfgang Paulsen: Expressionismus und Aktivismus. Eine typologische Untersuchung. Strassburg 1934.
 - 5) Wolfgang Rothe (Hrsg.): Der Aktivismus 1915-1920. München 1969. 「ローテはウィーンの前衛主義者 R・ミュラーが年報『目標』第 4 巻で表明した〈行動主義は表現主義から分派した〉という見解に賛成している」。
- Peter Sprengel: Geschichte der deutschsprachigen Literatur 1900-1918. München 2004, S. 112. 「行動主義は表現主義の部分的潮流にすぎなかったが、第一次大戦末期には非常に優勢だった」。
- Michael Stark: Literarischer Aktivismus und Sozialismus. In: York-Gothart Mix (Hrsg.): Naturalismus, Fin de siècle, Expressionismus 1890-1918. München / Wien 2000, S. 566. 「文学の行動主義は第一次大戦中と革命期における政治的な表現主義の真剣で綱領的かつ組織的な表現であった」。
- Otto F. Best: Handbuch literarischer Fachbegriffe. Frankfurt a. M. 1982, S. 19. 「行動主義は表現主義の Neben- und Gegenströmung であった」。
- 6) たとえば、Ludwig Rubiner: Der Mensch in der Mitte (Berlin Wilmersdorf 1917), Leonhard Frank: Der Mensch ist gut (Zürich / Leipzig 1918), Ernst Toller: Die Wandlung (Potsdam 1919), Ludwig Rubiner: Die Gewaltlosen (Potsdam 1919), Walter Hasenclever: Die Menschen (Berlin 1918), Ludwig Rubiner: Die Gemeinschaft (Potsdam 1919) および Kameraden der Menschheit (Potsdam 1919) など。
 - 7) 『アクツィオン』誌の協力者 Kurt Kersten の評。
 - 8) K・ヒラーが書いた『アクツィオン』誌の「覚書き(ノータ)」

- 9) Franz Pfemfert: „Die Aktion“ 1. (22. Mai 1911) Sp. 425.
- 10) Kurt Hiller: Die Jüngsten=Berliner. In: Thomas Anz und Michael Stark (Hrsg.): Expressionismus. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920. Stuttgart 1982, S. 33.
- 11) Ernst Blass: Das alte Café des Westens. In: Paul Raabe (Hrsg.): Expressionismus. Aufzeichnungen und Erinnerungen der Zeitgenossen. Orten und Freiburg i. Br. 1965, S. 38 f.
- 12) Heinrich Mann: Geist und Tat. In: Thomas Anz und Michael Stark (Hrsg.): op. cit. S. 271.
- 13) Franz Pfemfert: „Die Aktion“ 2. (1912) Sp. 453 f.
- 14) Armin T. Wegner: Aufbruch. Berlin 1910. In: Paul Raabe (Hrsg.): Expressionismus. Aufzeichnungen und Erinnerungen der Zeitgenossen. Orten und Freiburg i. Br. 1965, S. 20
- 15) Vgl. Thomas B. Schumann: Geschichte des „Neuen Clubs“ in Berlin als wichtigster Anreger des literarischen Expressionismus. Eine Dokumentation. in: Imprimatur — Neue Folge 3 (1961-1962), S. 55-70.
- 16) Kurt Hiller: Literaturpolitik, In: „Die Aktion“ 1. (1911) Sp. 138.
- 17) Kurt Hiller, E・BlassそしてA・Rammが『アクトイオン』誌（1912年）30, 32, 37, 41号にそれぞれ „Kondorkritiker“ を掲載して反論した。
- 18) Thomas Anz und Michael Stark (Hrsg.): op. cit. S. 432.
- 19) Wolfgang Rothe (Hrsg.): op. cit. S. 7.
- 20) ibid. S. 30.
- 21) Michael Stark: Für und wider den Expressionismus. Stuttgart 1982, S. 93.
- 22) Otto Flake: Von der jüngsten Literatur. In: Paul Raabe (Hrsg.): Expressionismus. Der Kampf um eine literarische Bewegung. Zürich 1987, S. 56.
- 23) Juliane Haberer: Kurt Hiller und der literarische Aktivismus. Frankfurt a. M. 1981, S. 239.
- 24) Wolfgang Haug (Hrsg.): Ludwig Rubiner. Künstler bauen Barrikaden. Darmstadt 1988. S. 7.
- 25) ibid. S. 61 f.
- 26) Rudolf Kayser: Aufruf und Flamme. In: „Die Neue Rundschau“ (1918) 2.
- 27) Wolfgang Haug (Hrsg.): op. cit. S. 101.
- 28) Ludwig Rubiner: Der Mensch in der Mitte. In: Thomas Anz und Michael Stark (Hrsg.): Expressionismus. Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920. Stuttgart 1982, S. 219.
- 29) Paul Raabe (Hrsg.): Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus 1910-1921. Stuttgart 1964, S. 57.
- 30) Wolfgang Haug (Hrsg.): op. cit. S. 134.
- 31) Paul Raabe (Hrsg.): Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus 1910-1921. Stuttgart 1964, S. 127.
- 32) Fritz Schlawe: Literarische Zeitschriften, Teil II. Stuttgart 1962.
- 33) Alfred Wolfenstein (Hrsg.): „Die Erhebung“. Berlin 1919, S. 3.
- 34) Wolfgang Rothe (Hrsg.): op. cit. S. 103.
- 35) Kurt Pinthus (Hrsg.): Menschheitsdämmerung — ein Dokument des Expressionismus. Hamburg 1955, S. 261.
- 36) Theodor Heuss: Die Politisierung des Literaten. In: Das literarische Echo 18 (1916), H. 11. Sp. 657-664.
- 37) Thomas Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen. Frankfurt a. M. 1990, S. 382 f.
- 38) Franz Werfel: Die christliche Sendung. Ein offener Brief an Kurt Hiller. In: Die Neue Rundschau 28 (1917), Bd. 1, S. 92-105.
- 39) Ernst Bloch: Geist der Utopie. In: Thomas Anz und Michael Stark (Hrsg.): op. cit. S. 139.